

問題と目的

大学生にとって大学内の友人関係は重要である。谷田川(2012)は大学内に話をしたり一緒に遊んだりする友達が複数存在することは、大学生活を満足なものにする要因になると示している。その中で、近年現代青年の問題として指摘されるのが友人関係の希薄化である(岡田, 2007 など)。具体的には、現代青年が友人と心理的な距離をおき、形だけの表面的なつきあい方をしていることが野田(1999)によって示されている。また、青年期の友人関係において仲間と同じであることを重視する傾向があることを指摘している(岡村・加藤・八巻, 1995)。しかし、黒沢・有本・森(2005)によって仲間への同質性への欲求を持っていることは学校生活でのストレスを強くし、ストレス反応も高くすることが示された。小藪・濱野・藤澤(2006)では、異質な他者に対して寛容であることが高信頼者の特徴として示されている。

これをふまえて高坂(2010)は、青年の友人関係における“異質な存在にみられることに対する不安”(被異質視不安)と“異質な存在を拒否する傾向”(異質拒否傾向)について定義し、友人関係満足度との関連をみている。高坂(2010)のモデルでは、異質拒否傾向が被異質視不安を引き起こし、また異質拒否傾向は友人関係満足度に対し直接的、あるいは被異質視不安を媒介にして間接的に、関わっているという予測をもとにモデルを作成し、モデルを検証する形で、被異質視不安及び異質拒否傾向と友人関係満足度との関連を検討した。大学生女子は異質拒否傾向が友人満足度を低めていることが示されたが、大学生男子では関連がみられなかった。また、大学生男子は被異質視不安が友人関係満足度を低めていることが示されたが、大学生女子では関連がみられなかった。本研究では、これらの関連がみられなかったことについての原因について検討していくことを目的とする。

女子の被異質視不安から友人関係満足度への影響の再検討 1)この影響に関連する要因として本来感をあげる。本来感とは“自分が自分らしくある感覚”とされる(伊藤・小玉, 2005)。長沼・落合(1998)によって、ありのままの自分を出しているつきあい方は女子の方が男子より多いこと、和田(1993)によって女性の方が男性よりも自己の開示を友人関係に求めるということが示されている。よってありのままの自分を開示したつきあいをすることが本来感を高め、大学生女子の友人関係満足度を向上させるものであると考えられる。

2)次に類似性をあげる。ここでいう類似性とは、自分が他者と似ていると思う度合である。高坂(2010)の研究で被異質視不安から友人関係満足度への影響が女性には見られなかった。その原因として、そもそもその友人と類似性が高いことが考えられる。友人との類似性が高いと思っていることで、被異質視不安をもつ

ていたとしても、友人関係満足度に影響しなかった可能性がある。Wright & Crawford(1971)は、女性と男性では求める類似性が異なることを示している。これらを踏まえ、本研究では被異質視不安と友人関係満足度との間に本来感という媒介変数があり、類似性という調整変数があると予測し、検討する。

男子の異質拒否傾向から友人関係満足度友人関係満足度への影響の再検討 3)この影響に関連する要因として、常に決まった仲間と行動するつきあい方をあげる。「常に決まった仲間と行動するつきあい方」とは長沼・落合(1998)によって示されたつきあい方である。グループの固定

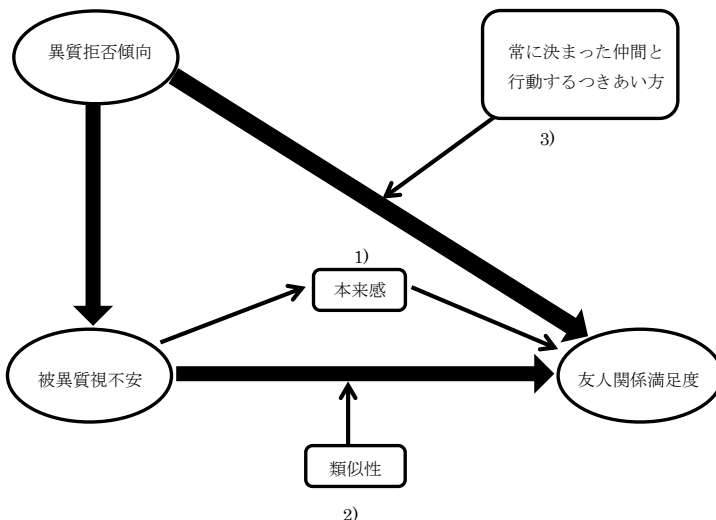


Figure 1 高坂(2010)のモデルに媒介変数と調整変数を加えたモデル

度が高い程、異質拒否傾向が高い人は、そのグループ内での異質な存在に対してストレスをもちやすくなり、固定度が低ければ異質な友人がいることが自分の友人関係に与える影響は少ないと考えられる。男性の方が女性よりも友人関係において共に行動することを重視するため(和田, 1993), 男性に影響があると予想される。異質拒否傾向と友人関係満足度に影響を与える「常に決まった仲間と行動するつきあい方」という調整変数があると予測し, 検討する。こうして高坂(2010)のモデルに媒介変数と調整変数を加えたモデル(Figure1)もとに分析をする。

方法

調査対象者 愛知教育大学の学生 1~4 年生男女 216 名(男子 94 名, 女子 122 名;平均年齢 19.64 歳, 標準偏差 1.22)を調査対象とした。

調査時期 2014 年 10 月に実施した。

調査内容

- (1)異質拒否傾向と被異質視不安：高坂(2010)の尺度を用いた。異質拒否傾向項目 12 項目と被異質視不安項目 12 項目を用いた。
- (2)友人関係満足度：高坂(2010)が用いている, 豊田(2004)の友人関係満足度項目 8 項目を使用した。
- (3)本来感：伊藤・小玉(2005)が作成した, 7 項目からなる本来感尺度を用いた。
- (4)類似性：Wright & Crawford(1971)が示した, 女性は価値観の類似を重視し, 男性は共通の趣味や経験を重視するという結果をもとに類似性を測る。各 1 項目を用いた。
- (5)常に決まった仲間と行動するつきあい方：長沼・落合(1998)の 5 項目の尺度を用いた。

結果

1. 異質拒否傾向, 被異質視不安, 友人関係満足度の性別比較

Table1 「異質拒否傾向」得点, 「被異質視不安」得点, 友人関係満足度得点の t 検定

	得点(SD)	t 値(df)
「異質拒否傾向」得点		
男子(93名)	2.54(0.79)	2.11*(214)
女子(123名)	2.33(0.70)	
「被異質視不安」得点		
男子(93名)	2.44(0.70)	1.06(214)
女子(123名)	2.55(0.78)	
友人関係満足度得点		
男子(93名)	2.92(0.35)	0.21(214)
女子(123名)	2.93(0.27)	

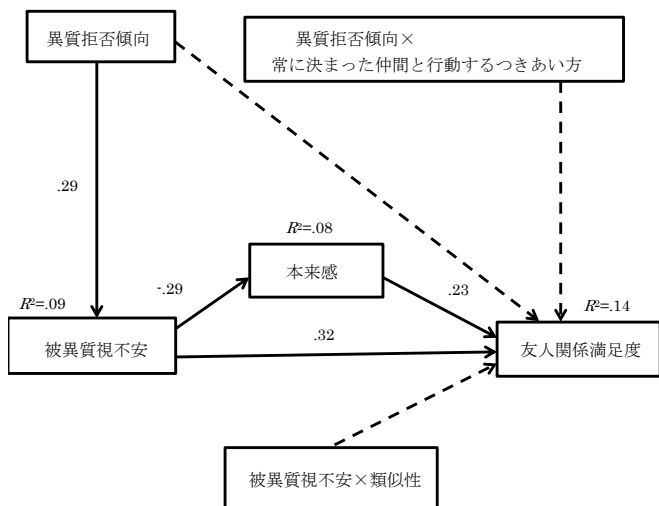
* $p < .05$

異質拒否傾向, 被異質視不安, 友人関係満足度を性別ごとに比較するために t 検定を行った(Table1)。その結果, 「異質拒否傾向」得点 ($t(214) = 2.11, p < .05$)では, 男子の方が女子よりも得点が高かった。

2. 本来感, 類似性, 常に決まった仲間と行動するつきあい方, を加えたモデルの解析

高坂(2010)のモデルに「本来感」, 「類似性」, 「常に決まった仲間と行動するつきあい方」が影響を与えるという予測をもとに作成されたモデル(Figure1)について, 構造方程式モデリングを用いたパス解析を行った。常に決まった仲間と行動するつきあい方については異質拒否傾向との交互作用項をつくり, その項目から友人関係満足度への影響をみた。また, 類似性は被異質視不安と交互作用項をつくり, その項目から友人関係満足度への影響をみた。

まずは, 大学生女子のパス解析を行った(Figure2)。その結果, 大学生女子では「異質拒否傾向」得点から「被異質視不安」得点に有意な正のパス係数($\beta = .29, p < .001$)が示された。また, 「被異質視不安」から友人関係満足度得点にも有意な正のパス係数($\beta = .32, p < .001$)が示された。さらに「被異質視不安」得点か



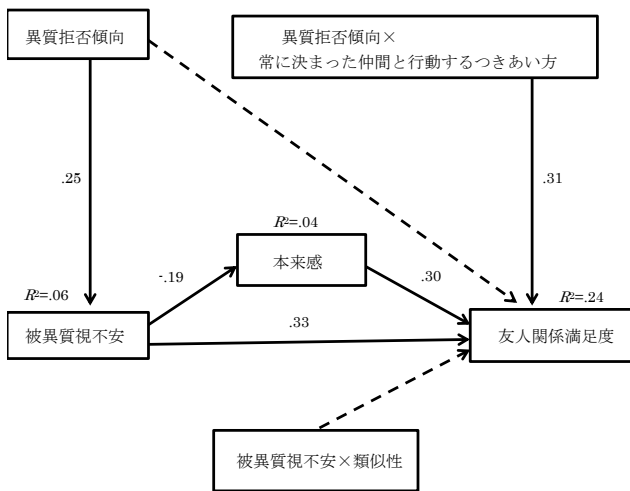
注) 実線は影響があったことを示し, 点線は影響がなかったことを示す。

Figure2 大学生女子のパス解析の結果

ら「本来感」に有意な負のパス係数($\beta=-.29, p<.01$)が示され、「本来感」得点から友人関係満足度得点に有意な正のパス係数($\beta=.23, p<.01$)が示された。被異質視不安と類似性の交互作用項から友人関係満足度への

影響はみられなかった。また、異質拒否傾向から友人関係満足度への影響もみられなかった。

次に大学生男子のパス解析をおこなった(Figure3)。大学生男子では「異質拒否傾向」得点から「被異質視不安」得点に有意な正のパス係数($\beta=.25, p<.05$)が示された。また、「被異質視不安」から友人関係満足度得点にも有意な正のパス係数($\beta=.33, p<.001$)が示された。さらに「被異質視不安」得点から「本来感」に有意な負の傾向($\beta=-.19, p<.10$)が示され、「本来感」得点から友人関係満足度得点に有意な正のパス係数($\beta=.30, p<.01$)が示された。そして、「異質拒否傾向と常に決まった仲間と行動するつきあい方」得点から友人関係満足度得点に有意な正の傾向($\beta=.31, p<.10$)が示された。



注) 実線は影響があったことを示し、点線は影響がなかったことを示す。
Figure3 大学生男子のパス解析

異質拒否傾向から友人関係満足度への影響はみられなかった。また、被異質視不安と類似性の交互作用項から友人関係満足度への影響もみられなかった。

3. 異質拒否傾向と常に決まった仲間と行動するつきあい方の単純傾斜検定 大学生男子において「異質拒否傾向と常に決まった仲間と行動するつきあい方」得点から友人関係満足度得点に影響が見られたことから、その交互作用についてさらに詳しく検討するため、「常に決まった仲間と行動するつきあい方」の平均値プラス1標準偏差(以下常に決まった仲間と行動するつきあい方高群とする)、およびマイナス1標準偏差の群(以下常に決まった仲間と行動するつきあい方低群とする)をもとに単純傾斜検定を行った。その結果、常に決まった仲間と行動するつきあい方高群では「異質拒否傾向」が高くなると友人関係満足度が高くなる傾向がみられた($\beta=.10, p<.10$)。

考察

異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度の性別比較についての検討 高坂(2010)の研究では異質拒否傾向、被異質視不安、友人関係満足度のいずれにおいても性別による差はみられなかった。しかし、今回の研究では異質拒否傾向において女子より男子の方が高いという結果が得られた。この理由として、大学生女子の異質拒否傾向得点の平均点が高坂(2010)より今回の研究のほうが低かったことがあげられる。その原因として、本大学の学生の特徴が関与している可能性がある。異質拒否傾向とは自分と違う人を受け入れない考えである。今回の対象者は教育大学の学生であり、将来教育者となる学生が多い。教師は分け隔てなく子どもと接することが求められるため、他大学の学生よりも異質な他者を受け入れる傾向が高い可能性がある。

本来感を媒介変数とした被異質視不安から友人関係満足度への影響 男女ともに被異質視不安が高まると友人関係満足度が高まるという影響がみられた。今回の研究の目的は大学生女子の被異質視不安から友人関係満足度への影響を再検討することであったが、高坂(2010)の研究とは異なり、影響があったことが確認された。異質に思われることを不安に思うということは反面、他者への配慮ができるということでもあるため、友人とのつきあいに良い影響を与えていた可能性も考えられる。ただし、本来感による影響もみられ、男女ともに被異質視不安が高まることによって本来感が低くなると、友人関係満足度を低めるということがわかった。つまり、被異質視不安と友人関係満足度との間には本来感という媒介変数が存在し、他人から異質にみられることを不安に思うことが本来感を低下させると、友人関係

満足度が低くなる場合があるということがわかった。先行研究では男子大学生は女子大学生に比べて本来感を重視するつきあい方は少なかったが、男子大学生にも本来感による影響があることがわかった。

類似性を調整変数とした被異質視不安から友人関係満足度への影響 今回の研究では被異質視不安から友人関係満足度への関係に類似性は影響を与えないということがわかった。これは、直接被異質視不安から友人関係満足度への影響が男女ともにあったため、類似性による影響はみられなかったと考えられる。

常に決まった仲間と行動するつきあい方を調整変数とした異質拒否傾向から友人関係満足度への影響 男子においては、常に決まった仲間と行動するつきあい方が高い場合は、異質拒否傾向が高まると友人関係満足度が高まるということがわかった。つまり、いつも同じ仲間でも過ごす大学生男子は自分と合わない人を拒否し、そういった人のいない仲間をつくり、いつもその仲間でも過ごす。そうすることで友人関係に安心感を与え、心地よく過ごす傾向があると考えられる。なお女子においては、高坂(2010)では異質拒否傾向が高まると友人関係満足度が低くなるという結果がみられたが、今回はみられなかった。この理由は今回の研究では十分な考察ができなかった。

異質拒否傾向から被異質視不安への影響 男女ともに異質拒否傾向が高まると被異質視不安が高まることが示された。女子においては高坂(2010)の結果と同じであったが男子においてはみられなかった結果である。高坂(2010)の研究では男子の結果においても同様の結果がみられるという仮説のもので研究をしていたため、第一種の過誤を犯していた可能性がある。

引用文献

- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討
教育心理学研究, **53**, 74- 85.
- 高坂康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向—青年期における変化と友人関係満足度との関連— 教育心理学研究, **58**, 338-347.
- 小藪明生・濱野 強・藤澤由和(2006). ソーシャル・キャピタルにおける一般的な信頼の規定要因に関する検討 新潟医療福祉学会誌, **6**, 48 - 55.
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫 (2005). 女子中学生の仲間関係のプロフィールとストレスとの関連について 目白大学心理学研究, **1**, 13 - 21.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友だちとのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究 **10**, 35-47.
- 野田陽子 (1999). 青少年の友人関係とその変化 青少年問題, **46**, 36-41.
- 岡田 努 (2007). 現代青年の心理学 世界思想社
- 岡村達也・加藤美智子・八巻甲一(編) (1995). 思春期の心理臨床—学校現場に学ぶ「居場所」づくり—日本評論社
- 豊田瀬理乃 (2004). 対人関係上の信念の変化からみた友人関係の分析 平成 15 年度筑波大学人間学類卒業論文(未公刊)
- 和田実 (1993). 同性友人関係—その性および性役割タイプによる差異— 社会心理学研究 **8**, 67-75.
- Wright, P. H. & Craeford, A. C. (1971). Agreement and friendship: A close look and some second thoughts. *Representative Research in Social Psychology*, **2**, 52-69.
- 谷田川ルミ (2012). 現代学生の『移動』問題—在学中に進路変更を希望する学生の実態と背景 山田剛史(編) 現代の大学生の人間関係—「先生」「友だち」の存在が大学への着地を促す—『第 2 回大学生の学習・生活実態調査報告書』ベネッセ教育総合研究所, pp.22-23.